



## ロバート・フロストの3大対話詩 (翻訳)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00011042">https://doi.org/10.24729/00011042</a>

## ロバート・フロストの3大対話詩（翻訳）

村上陽介

### 作男の死

メアリーは、テーブルに座りランプの炎を物思いにふけて見つめながら、ウォーレンを待っていた。彼の足音を聞いたとき、彼女は暗くなった廊下をそっと走って行った。玄関のところで彼を出迎え、彼が不意打ちを食らわぬよう前もって知らせようとしたのだ。「サイラスが戻ってきたの。」自分も一緒に出ながら、彼女は彼を戸口から外へ押し出し、ドアを閉めた。「親切にしてあげてね」と彼女は言った。彼女はウォーレンの両腕から彼が買ってきた品物を受け取り、それをポーチに置き、それから彼を引っ張って、木造の階段の上に自分の横に並んで座らせた。

「僕が一度でもあいつに少しでも親切でなかったことがあるかい？でも、あいつに戻ってこさせる気はないよ」と彼は言った。  
「この前干し草を作った時そう言っただろう？もし今よそへ行ったら、それでおしまいだぞ、と言っておいたんだ。あんな奴、何の役に立つんだ？他の誰があいつの面倒を見るというんだ？あんなに年をとって、ほんの少しのことしかできないのだから。そのわずかにあいつにできることにしても、まったく当てにはならない。」

あいつに一番助けてもらいたいとき、いつもいなくなる。

あいつは少しは賃金を稼ぐべきだと思っているんだ、

少なくともタバコを買うぐらいの金はね。

恵んでもらって恩義を感じなくてもよいようにさ。

『わかった』と僕は言うんだ。『そうできたらいいんだけど、でも僕には決まった賃金は支払えない。』

『ほかにできる人がいるんだ。』『それなら、その人に支払ってもらわなきゃならないね』

僕はあいつがもっと稼ごうとするのは構わないんだ。

もし本当に事情がそうだったのならね。ただね、決まっているんだ、あいつがそんなことを言い始めたら、誰かが小遣い銭をやるといってあいつを説き伏せて、自分のところへ来させようとしているんだ。

干し草を作る時期、猫の手も借りたいようなときにさ。

冬になるとあいつは僕たちのところに戻ってくる。もううんざりだ。」

「しー！そんなに大きな声しないで。あの人に聞こえるわ。」とメアリーは言った。

「聞いてもらいたいもんだね。いずれ聞いてもらうことになるんだから。」

「あの方は疲れ切っているのよ。ストーブのそばで眠ってるわ。

私がロウさんの家から帰ってきてみたら彼がいたのよ。

縮こまって納屋のドアにもたれて、ぐっすり眠り込んでいたの。

哀れな姿で、見てぞっとしたわ。

笑ったりすることじゃないわ、あなた。私、あの人だとわからなかった——思いがけなかったものだから。それにあの方は変わったわ。

あなたもあとで見ればわかるわ。」

「あいつはどこへ行ってたって？」

「サイラスは言わなかったわ。私はあの人を母屋に引っ張って来て、紅茶を出し、タバコを吸わせようとしたの。旅のことを話させようとしたのよ。何もやってもうまくいかなかった。ただうつらうつらするだけ。」

「何て言ってた？何か言ってたかい？」

「ほとんど何も言わなかったわ。」

「何か言っただろう。隠さずに言えよ。あいつ、僕のために牧草地の溝を掘りにやって来た、と言っただろう。」

「ウォーレン！」

「でも言っただろ。そうなんだろう？」

「もちろん言ったわ。あなたはあの人に何を言って欲しいわけ？あの気の毒な老人がつつましくかに自尊心を保とうとするのをあなたが嫌がったりするはずはもちろんないわよね。もしあなたが本当に知りたいのなら言うけど、あの方は上の牧草地もきれいにするつもりだとも言ったわ。似たようなことを以前にも聞いたことがあるような気がするでしょうね。ウォーレン、あなたにも聞いて欲しかったわ、あの方が何でもかんでもごちゃまぜにして喋るのを。私、二、三回手を休めてあの方を見たわ——聞いていてとても変な感じがしたの。で、寝言を言っているのかどうか確かめたかったの。あの方はハロルド・ウィルソンについて喋り続けたわ。——覚えているでしょう——四年前にあなたが干し草作りに雇った青年よ。彼はもう学校を卒業して、母校の大学で教えているの。サイラスは、あなたに彼をぜひまた雇ってもらわなきゃって言うの。」

二人がチームを組んで仕事をするつもりだって。  
二人が力を合わせて、うちの農場をきれいにすると言うの。  
それをほかのいろんなこととごっちゃにして喋ったのよ。  
サイラスは、若いハロルドはなかなかいい青年だと考えているの。  
教育についてばかな考えをしていると思ってはいるけど。  
あなたは二人がどんなに言い争ったか知っているでしょう。  
七月中ずっと、ぎらつく太陽の下で、  
サイラスが荷車の上において干し草を積み上げ、  
ハロルドは脇において干し草を投げ上げながらね。」

「そう、僕は二人の声がまったく聞こえないところにいるように気をつけた  
もんだよ。」

「それでね、あの頃のことをサイラスを夢のように悩ませるの。  
そんなことはないだろうと思えるのにね。なかなか忘れられないことって  
本当にあるものなのね。  
ハロルドの若い大学生らしい自信たっぷりの態度が気に入らなかったのよ。  
もう何年もたっているのに、未だにつぎつぎ思いついているの。  
自分がああとき言えばよかったと今になって思ううまい理屈をね。  
私にはあの人のが気持ちがわかるわ。どんな気がするか、私も知っているわ、  
言うべきことを手遅れになってから考えつくつと。  
サイラスの頭の中ではハロルドはラテン語と結び付いているのよ。  
あの方はハロルドが言ったことについて私がどう思うか尋ねたわ。  
ラテン語が好きだったから、バイオリンを習うようにラテン語を  
勉強したってハロルドは言ったのよ。なんていい草でしょうね。  
サイラスは、ハロルドに信じてもらえなかったの、  
自分がハシバミの枝で地下水を見つけることができるってことを。  
学校がいかにか彼の役に立たなかったかということがそれでわかるとサイラス  
は言ってたわ。」

あの人はそれをまた議論し直したいと思ったの。でも、一番考えているのは、どうやって干し草を馬車に積みばよいかハロルドに教えるチャンスがまたあったらいいのに、ということなの。」

「そうだな。それがサイラスの特技だからな。  
あいつはフォークの一杯分をちゃんと束ねて、  
あとでわかるように番号札を付ける。  
それで、あいつは簡単に束を見つけ、動かすことができる、  
干し草を降ろすときにね。サイラスはそのことはいまやうまくやってのけるよ。  
あいつは大きな鳥の巣のように束になった状態で干し草を取り出す。  
自分を持ち上げようと懸命になることなど決してない。  
持ち上げようとしている干し草の上にうっかり立っててね。」

「あの人は、もしそれをハロルドに教えることができたなら、世の中で少しは誰かの役に立つ人間になるかもしれないと考えているの。  
サイラスは、若い男が本の虫になっているのを見るのが嫌なの。  
気の毒なサイラス。他人のことをとても心配しているけど、  
自分自身は自慢して振り返って見るものは何もないし、  
希望をもって待ち望むものも何もない。  
今もそうだし、今までだってそうだった。これから先も同じでしょうね。」

欠けた月が、西に傾いていた、  
連なった小山の方へ空全体を引っ張りながら。  
その光が彼女の膝へ柔らかく降り注いだ。彼女はそれを見て、  
エプロンを月の光に向けて広げた。彼女は片手を差し伸べた、  
ハーブの弦のような朝顔のつるの間に。  
そのつるは露を帯びて花壇から庇までぴんと張っていた。  
まるで彼女が夜、そばにいる彼の心を動かすために、  
耳に聞こえない優しい音楽を奏でているかのようなようだった。  
「ウォーレン、あの人は死ぬために家へ帰ってきたのよ。」

「あなたも今度はあの人が行ってしまふんじゃないかって心配しなくてもいいわ」と彼女は言った。

「家ねえ」と彼は穏やかにからかって言った。

「そうよ。家でないとしたらなんなの？」

家というものをどう考えるかにすべてがかかっているのよ。  
もちろんあの人は私たちにとって何ていうこともない人だわ。  
臭跡を追って疲れ果て、林から出て私たちのところにやって来た、  
それまで見たこともなかったあの獵犬と同じようにね。」

「家は、ぼくたちが戻らなければならなくなったときには、  
その人たちが受け入れなければならない所というわけだ。」

「私なら、家は、  
無条件でとにかく受け入れてもらえる所だと言うわ。」

ウォーレンは身体を乗り出し、一、二歩前に出て、  
小さい木切れを一本拾い、それを手にして戻った。  
そしてその木切れを片手で握って折り、ぽいと投げた。  
「サイラスが僕たちのほうを頼って当然だと君は思う、  
あいつのお兄さんよりも？十三マイル行くだけで、  
道は曲がりくねっているけど、あいつのお兄さんの所へ行き着けるんだよ。  
サイラスは今日それくらいは間違いなく歩いてきたんだ。  
お兄さんの所へ行けばいいじゃないか。あいつのお兄さんは金持ちで、  
大した人物だ——銀行の重役だよ。」

「あの人は一度もそんなこと私たちに話したことはないわ。」

「でも、僕たち、知ってるよ。」

「もちろん、私はあの人のお兄さんが助けるべきだと思うわ。  
もし、必要なら、そうなるよう私が手はずを整えるわ。彼は当然  
サイラスを受け入れるべきだし、それに、喜んでそうするかもしれないわ。  
彼は見かけよりいい人なのかもしれない。  
でも、少しはサイラスを可哀想だと思ってあげてよ。  
親族であることを誇りに思ったり、お兄さんに何か求めていたとしたら、  
あの人がお兄さんのことを黙ったままでいると思う？」

「二人はどうしてうまく行かないんだろう？」

「私にはわかるわ。

私たちは気にしないけど、サイラスはあんな人なので、親族は我慢できない  
のよ。  
あの方はこれといってとくにひどいことなどやったことはないわ。  
あの方はわかってないのよ、どうして自分がほかの人のように立派でないか。  
あの方は役に立たない人間だけど、  
恥ずかしい思いまでしてお兄さんの気に入るようなことはしたくないの。」

「僕だって、サイラスが誰かの気持ちを傷つけたことがあるなんて考えられ  
ないよ。」

「そうよ。でも、私の心は痛むわ、あの人があの人を取った頭を  
鋭い角のある椅子の背もたれの上に乗せて揺すのを見ると。  
ソファに寝かせてあげようとしたけど、どうしても聞き入れなかったの。  
あなたが中に入って、何とかして下さらなきゃ。  
今晚のあの人のお寝場所をあそこに用意したわ。  
びっくりするでしょうね、あの人があんなに衰弱したかをあなたが見たら。  
あの方が働ける時期はもう過ぎてしまったのよ。間違いないわ。」



「僕ならせつかちにそんなことは言わないよ。」

「私も何もせつかちに言ってるわけじゃないわ。行って自分の目で確かめてよ。」

でも、ウォーレン、忘れないでね、

あの人が牧場に溝を掘るのを助けるために来たことを。

あの人には計画があるのよ。サイラスをばかにして笑ったりしないでね。

あの人は今はそのことを言わないかもしれないけど。でも、言うかもしれないわ。

私はここに座って、見届けるわ、

あの小さい流れ雲が月の面をかすめるかどうか。」

流れ雲は月の面をかすめた。

そして、そこに三つのものがおぼろげに並んでいた。

月と小さい銀白色の雲とメアリー。

ウォーレンが戻って来たが、あまりにも素早すぎると彼女には感じられた。

彼はずっと彼女のそばに来て、彼女の片手を取り、待った。

「どうだったの？」と彼女は尋ねた。

「死んだよ」とだけ彼は答えた。

## 山

その山は町を影で包み込んでいるかのようだった。

私は一晩その町で泊まったのだが、寝る前にそれだけのことは見て取った。

つまり、西の方角には星が見えないことに気がついたのだ。

山の黒い姿が空に食い込んでいたというわけだ。  
その山は近くにあるように思えた——私はそれが壁で、  
自分がその背後にいて風から守られているかのように感じた。  
けれども、明け方に前の晩に見ていなかったものを見ようと出かけたとき、  
その町と山の間に何枚かの畑、一本の川、  
そしてその向こうにさらに何枚かの畑があることに気付いた。  
川はそのときは水かさが減っていて、  
丸石の上を広範囲にわたって音を立てながら流れていた。  
しかし、その川が春にしでかしたことの形跡が残っていた。  
良好な牧草地に溝ができており、草の中には  
いくつもの砂の畝、そして樹皮が剥がれた流木があった。  
私は川を渡り、山に浴って回ってみた。  
そこで私は一人の男に出会ったが、彼はとてもゆっくり歩いていた、  
顔の白い雄牛たちに重い荷車を曳かせながら。  
だから、彼にすっかり止まってもらっても差し支えないように思えたのだ。

「ここは何という町ですか？」と私は尋ねた。

「ここ？ルーネンバーグだよ。」

そうすると、私は考え違いをしていたのだ。橋の向こう側の  
私の泊まった町は、その山の町ではなく、  
ただ夜にその影のような存在を感じただけであった。

「おたくの村はどこなんですか？ここからだいぶ離れているんですか？」

「村なんかありませんよ。農家が散らばっているだけですよ。  
この前の選挙のときには、たった六十人の有権者しかいませんでしたよ。  
それ以上にたくさん増えることなんてとてもできないんです。  
あいつが場所を全部ふさいでしまっているから。」彼は突き棒を動かした。  
その突き棒が向けられた先に山がそびえていた。

牧草地が山腹の少し上のところまで広がっていた。  
それから幹の見える木々でできた壁があり、  
その上は、木々の先端と、  
葉の間に見え隠れする崖がいくつか見えた。  
一つの乾いた谷が大枝の下から現われて、  
山腹の牧草地へと延びていた。

「あれは道みたいですね。

あれがここから頂上まで行ける道ですか？  
今朝は無理ですけど、また別の機会にとお思いましてね。  
もう朝食に戻らなきゃなりませんから。」

「こちら側から登るのは勧めませんよ。  
まともな道なんてないからね。これまで登ったことのある人たちは  
ラッドの所から登ったはずですよ。  
五マイル戻った所のね。場所はちゃんとわかりますよ。  
この前の冬に、少し上まで木を切り出したから。  
お連れしたいけど、私とは逆の方向なんでね。」

「おたくは一度も登ったことはないんですか？」

「山腹にはあちこち登りましたよ。

鹿狩りとマス釣りのためにね。小川が一本、  
あの山のどこからか流れ出てましてね。聞いたところでは、  
頂上、まさしくてっぺんからだそうです。不思議なもんですよ。  
だけど、この小川で面白いのは、  
それがいつも夏は冷たく、冬は暖かいということなんです。  
とても見事な眺めの一つは、  
冬、その小川が雄牛の息のように湯気を立て、  
そしてそのうちに川の両側にずらっと並んだ茂みに

一インチの長さの刺や剛毛状になった霜がつくのを見ることですよ。  
どんなものかご存じでしょう。そして、それに陽の光が当たってごらんない！」

「あちこちよく見えるでしょうね、あんな山からは。  
もし頂上までびっしり木が生えているのでなければね。」  
私は、葉でできた目隠しを通して、  
大きな花崗岩のテラス状になったものをいくつか見た。  
陽が当たっている所もあれば陰になっている所もある、  
登るときに片膝をついて休むことができる岩棚だ——  
背後には百フィートの断崖絶壁。  
あるいは、その上で向き直って座り、見はるかしたり見下ろしたりできる。  
そうなれば、裂け目の間に生えた小さいシダが肘に当たることになる。

「それはなんとも言えませんね。でも、泉があるんですよ、  
ちょうどてっぺんにね。ほとんど噴泉と言ってもいいような泉です。  
そいつは一見の価値がありますよ。」

「もしそこにあればですがね。  
おたくは一度も見たことはないんですね？」

「間違いないですよ、  
そこにあることはね。私は見たことは一度もないが。  
ずばり頂上というわけではないかもしれないが、  
そんなに下に降りなくても、上からの水が少しは湧き出るだろうしね。  
かなり下がった所だったとしても、長い距離を下から登ってきた人には  
そうは感じられないかもしれないし。  
一度、私は山を登っていく男に、  
見て、あとでどうだったか教えてくれと頼んだんだよ。」

「その人は何と言ったんですか？」

「アイルランドのどこかの山の頂上に湖があると言いましたよ。」

「でも、湖では話が違いますよ。泉のほうはどうだったんですか？」

「泉が見える所までは登らなかったんですよ。だから私はこちら側から登ってみるのはお勧めしないんです。その人はこちら側から登って見たんです。私もずっと自分で行ってそれを見ようと考えてはきたんですが。でも事情はおわかりでしょう。一生ずっとその麓で働いてきた山にいまさら登ってみるなんて、それほど意味のあることとは思えないんですよ。どうしろって言うんですか？オーバーオールを着て、大きい棒を持って行けばいいんですか？雌牛どもが乳絞りの時間になっても横木の所へ戻ってこないときと同じように。それとも、迷ったアメリカクロクマを撃つための猟銃を持って行くんですか。単にあの山に登るという目的だけのために登ってみるなんてことはピンとこないんですよ。」

「私なら、もし登りたくないのだったら登りませんよ。単に山に登るという目的のためだけなら登りませんよ。あの山の名前はなんと言うんですか？」

「私たちはホーと呼んでいますよ。その呼び名が正しいかどうか私は知らないけどね。」

「歩いてぐるっと回れますか？歩くには距離がありすぎますか？」

「車でドライブして回っても、ルーネンバーグから出ないですみますよ。しかしまあ、それもぎりぎりですけどね。」

町の境界線が山に非常に接近しているからね。  
ホーが町で、町がホーなんですよ。  
ただ家が数軒ふもとに点在してますけどね。  
まるで上の崖から崩れ出て、  
他の石よりも少し遠くまで転がり落ちてきた丸石のようにね。」

「十二月に暖かく、六月に冷たいということでしたね？」

「水の温度そのものはまったく変わらないのだと思いますよ。  
ただ、あなたも私も、冷たいものと比べたら暖かく感じ、  
暖かいものと比べたら冷たく感じるということはよくわかってますよね。  
でも、何事につけ、物の言い方に面白味があるんですよ。」

「おたくは、ずっとここに住んでいるんですか？」

「ずっとだよ。ホーが  
まだ小さくて……」ホーがまだ小さくて何ぐらいの大きさだったころから  
ずっと、と言ったのかは聞き取れなかった。  
男は彼の細い突き棒で鼻と右の横腹に軽く触れ、  
自分のほうに雄牛たちを引き寄せた。  
そして、進むよう命令し、もう前に進んでいた。

### 自家での埋葬

彼は階段の下の所から彼女を見た、  
彼女が彼を見る前に。彼女は階下へ降りかけていた、  
何か彼女に恐怖心を抱かせるものを肩越しに振り返って見ながら。  
彼女はためらいながら一步降りたが、それからまた  
元の所へ上がってもう一度見た。彼女の方に進み寄りながら

彼は言った。「そこからいつも何を見てるんだい？

僕は知りたいんだよ。」

それを聞くと、彼女は振り返り、スカートをたくし上げもせずにはしゃがみ込んだ。

そして彼女の顔から恐怖の色が消え、無表情な顔つきに変わった。

彼は、時間を稼ぐために「君は何を見ているんだ？」と言いながら階段を登り、やがて彼女が彼の下で身をすくめているような格好になった。

「僕は今それを突き止めてやる。ぜひとも教えてくれ。」

彼女は、その場でわずかに首筋をこわばらせて押し黙り、彼に答えようとはまったくしなかった。

彼女は彼が眺めるにまかせた。彼に見えるはずがない、何を見ても気がつかない男なんだから、と思いながら。

しばらくの間、彼には見えなかった。

たが、ついに彼は「そうか」とつぶやき、さらにもう一度「そうか」と繰り返した。

「何なの？何よ？」と彼女は言った。

「見えてるあれだよ。」

「あなたに見えるもんですか」と彼女は言下に否定した。「何だか言ってみなさいよ。」

「すぐに見えなかったのが不思議だなあ。

ここから見て気付いたことは一度もなかった。

慣れてしまっているからに違いない。それが原因なんだ。

僕の家族が眠っているあの小さな墓地！

とても小さいので、窓枠にすっぽり納まってしまおう。

寝室よりほんの少し大きいぐらいかな？

三つの粘板岩の墓石と一つの大理石の墓石、

上の方が幅が広がっている小さな石板が、  
丘の斜面で日光に照らされている。  
あんなもの、気にすることはないさ。  
でも、僕にはわかる。あの墓石じゃなくて  
君は子どもの塚のことを.....」

「やめて、やめて、やめて、  
やめてったら」と彼女は叫んだ。

彼女は、階段の手すりの上に置かれている彼の腕の下から  
体を縮めながら後ずさりし、階下にさっと降りた。  
彼女がとてもにらみつけるような顔をして彼の方を振り返ったので、  
「男が自分の亡くした子どものことを話しちゃ駄目なのか？」  
と彼は思わず二回繰り返して言った

「あなたは駄目よ！ああ、私の帽子はどこ？ああ、帽子なんかいらわないわ！  
ここから出なくっちゃ。外の空気に当たらないと。  
男の人でそんなことができる人がいるかどうか私は知らないわ。」

「エイミー！今度はほかの人の所へいかないでくれよ。  
ちゃんと聞いてくれ。下へ降りてはいかないから。」  
彼は座って頬杖をついた。  
「君に一つ尋ねたいことがあるんだ。」

「どうやってそれを尋ねたらいいかも知らないくせに。」

「なら、教えてくれよ。」

彼は返事をせずに指でドアの掛け金を動かした。



「僕が何か言うとほとんどいつも君を怒らせてしまう。  
どんな話題にせよ、僕がどう言ったら君の気に入るのか、  
わからないんだ。でも、教えてくれれば、  
うまくやれるかもしれない。どうすればいいのか、見当がつかないけど。  
男はある程度男であることをやめなきゃならない、女を相手にするときは。  
僕たちは何か協定を作ってもいい。  
君が特に触れてもらいたくないことがあれば、それを教えてくれたら、  
僕はそれに干渉しないようにするよ。  
お互い愛しあっている二人の間でそんなことはしたくないけど。  
愛しあっていない二人ならそんな協定なしでは一緒に暮らせない。  
だけど、愛しあっている二人なら、協定などしたら一緒に暮らせなくなるよ。」  
彼女は少し掛け金を動かした。「おい、行くなよ。  
今度はほかのだれかの所へ問題を持ち込むなんてことはしないでくれ。  
人間にわかることなら僕に話してくれよ。  
君の悲しみの仲間入りをさせてもらいたいんだ。  
君が僕を寄せ付けようとしなくてそこに立っていると、  
僕が他の人たちととても違っているみたいだけど、  
そんなことはないよ。ちゃんと話してみてくれよ。  
ただ、君は少しやりすぎだとは思うけどな。  
初めての子を亡くした母親の悲しみが、  
そんなに慰めようもないものだと思ってるのは  
どうしてなんだ。君を愛している僕がここにいるというのに。  
あの子のことはそれだけ悲しんだらもう十分だとは思わ.....」

「ほら、あなた、私を馬鹿にして笑っているのね！」

「とんでもない。そんなことないよ！」

腹が立つなあ。君の所へ降りて行くぞ。  
まったく何て女だ！つまり、こういうことだ。結局、  
男は自分の死んだ子どもの話をしちゃいけないというわけだ。」

「そうよ。だって、あなたはどう言えばいいのかわかってないもの。もしあなたに思いやりというものがあれば——あの子の小さい墓を自分の手で掘ったあなた。よくもあんなことができたものね。私はその窓から見たのよ。あなたはこうやって、こうやって砂利をぽんぽん空中に投げ上げる。するとその砂利がさっと落ちてきて、穴のそばの盛土をまた転がり落ちていったわ。私は思ったの。あの男の人はだれなんだろうって。わたしの知らない人だったわ。私はそっと階段を降り、そしてもう一度見るためにまた階段を上がったの。あなたはまだ踏みぐわを振り上げ続けてたわ。そして、あなたは中に入って来た。あなたの低い、轟くような声が台所で聞こえたわ。なぜだかわからないけど、私は近くへ行って自分の目で確かめたの。あなたは自分の子どもの墓の真新しい土を靴につけたまま平気で座って、日常ありきたりのことを口にしてたわ。踏みぐわを入り口の外の壁にもたせかけてたわ。だって、私、それをちゃんと見たんですもの。」

「こんなひどい話、聞いたことがない。僕は呪われているんだ。きっとそうだ。」

「わたし、あなたが言った言葉をそのまま言えるわ。『三日間、朝がた霧が降り、一日雨が降れば、いくらうまく作ったカバの木の柵でも腐ってしまう。』考えてみて。あんなときにそんな話をするなんて！どれくらいでカバの木が腐るかということが、暗くした居間に安置してあったものと何の関係があったというの？あなたはどうでもよかったのよ。人が死ぬときには、友人たちは悲しむけど、

中途半端なものよ。いっそ最初から悲しまないほうがいいくらいだわ。  
病気になってから死ぬまで、  
私たちはひとりぼっちなのよ。そして、死ぬときにはもっと孤独だわ。  
友人たちは墓までついてくる振りをするけど、  
でも私たちを埋葬する前に、彼らの気持ちは逆を向き、  
一所懸命に自分たちの生活、生きている人々、  
自分たちが理解できる事柄へ戻ろうとするのよ。  
だけど、この世は邪悪なのよ。私はこんなに悲しまなくてすむのよ、  
もし私にこの世が変えられるなら。きっとそうよ、そうなのよ。」

「ほら、君は言いたいことを全部言って、気持ちが楽になっただろう。  
君はもう出て行かないね。泣いてるじゃないか。ドアを閉めて。  
もう気がすんだだろう。もういいじゃないか。  
エイミー、だれか道をこちらへやって来るぞ！」

「あなたっていう人は！あなたは話せばそれで済むと思ってるのね。  
この家を出てどこかへ行かなくっちゃ。どうしたら私の気持ちを……。」

「出て行ってみろ！」彼女はドアをさらに広く開けていた。

「どこへ行くつもりなんだ？まずそれを言ってからにしてくれ。  
僕はあとから追いかけて力づくで君を連れ戻すぞ。絶対に！……。」

注記：テキストは、Edward Connery Lathem, ed., *The Poetry of Robert Frost: The Collected Poems, Complete and Unabridged* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1979) を用いた。今回訳出した三つの対話詩、“The Death of the Hired Man” と “The Mountain” と “Home Burial” は、もともと *North of Boston* (1914) に含まれていたものだが、上記のテキストではそれぞれ 34-40 ページ、40-44 ページ、51-55 ページに収録されている。